



500 経営編



淘汰更新と酪農経営

～乳牛の淘汰更新が経営を左右する～

時田 正彦

1 最近の淘汰更新

経営の発展には牛乳生産に対して投下する資産を古いものから新しいものへ、経営に対する貢献度が弱くなったものから貢献度が期待できるものへと更新を図っていく必要があります。乳牛も同様で、計画的に淘汰更新を図っていくことは重要な経営活動といえるでしょう。

しかし、最近の淘汰更新を見ると、淘汰すべき牛ばかりではなく、残したい牛までも淘汰更新が行われるケースが多く見られるようになってきました。その最たる理由は疾病や事故による廃用です。(図参照)

これは当所で行ったアンケート調査結果の中から、過去1年間の淘汰理由を整理したものです。これによると「疾病・事故」が53%と半数以上を占めており、次いで「繁殖成績低下」22%、「乳質が悪い」13%の順になっています。疾病・事故の中には若齢で高泌乳の牛も多く含まれていることから、これらの理由で廃用されることによる経済的ダメージは非常に大きなものとなります。ちなみに、当所の調査では対象農家の平均淘汰更新率（年間）は21.7%でありました。

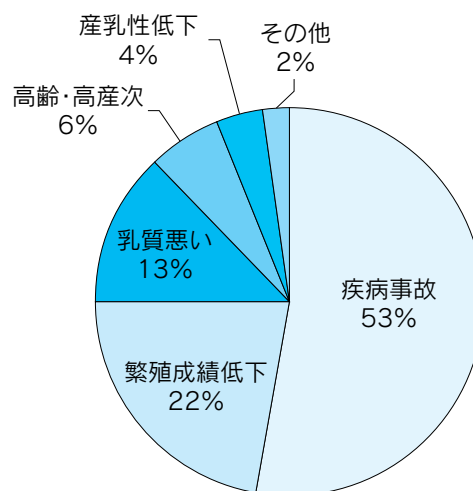


図.過去1年間の淘汰理由

注) 当所アンケート調査(1998年)結果から

2 淘汰更新率上昇による経済的影響

淘汰頭数が増加した場合に経営に対して次のような悪影響をもたらすことが考えられます。

- 1) 育成牛の多くを更新用としなければならない。
- 2) 販売用育成牛頭数の減少
- 3) 後継牛候補の選抜圧低下
- 4) 供用年数が短縮し、乳牛償却費が増大する
- 5) 乳牛処分損の発生



1) について、各平均産次とするためには何%の淘汰更新率となるのか、また平均産次毎に頭数を維持するための保有育成牛は何頭かを当所で以下の条件を用いて試算してみました（表参照）。それによると、淘汰更新率が50%を超えてくると成牛以上の育成牛頭数を保有していないと、頭数が維持できなくなることがわかります。試算の条件は①成牛を全て自家産牛で賄うこと、②経産牛70頭を維持することとしました。

表. 淘汰更新率と育成牛頭数

産次	淘汰更新率 %	保有育成牛頭数 頭	総頭数 頭
2産	52	78	148
3産	33	49	119
4産	24	36	106
5産	19	28	98
6産	16	24	94
7産	13	19	89

注1)「農地の高度利用が乳牛資源の利用延長に及ぼす影響に関する調査研究」酪農総合研究所(2000年)より引用
注2)前提条件を経産牛70頭、初産分婯月齢26カ月、頭数規模は現状維持として試算した

3 淘汰更新は計画的に

このように、淘汰更新率の上昇は経営を大きく左右することを考えなければなりません。ただ、淘汰更新率の上昇といっても、淘汰予定牛が多く、後継牛を十分に確保している状況にあって、乳牛の改良など、明確な目的がある中での淘汰更新は一概にマイナスとは言えません。現に積極的に淘汰更新を進めることで牛群の改良を図り、高収益を実現する経営体もあります。問題視しなければならないことは、同じ淘汰更新率の上昇であっても、疾病や事故によって牛乳生産の主力として供用しなければならない牛の淘汰更新が多くなった場合です。これによって群全体の生産性の低下はもちろんのこと、前述したような後継牛の保有頭数の増加や選抜圧の低下など、経営を圧迫することにつながります。

では、安定した頭数維持のための淘汰更新率は何のラインに置くか、については表より、経産牛頭70頭の約半分を保有頭数とする24%、約1/4が一つの目安になると考えられます。

日ごろの経営活動の中で、乳牛の淘汰更新を計画的に進めるため、また疾病や事故による廃用を少なくさせるために基本ではありますが、乳牛の飼養管理技術を研鑽し、健康に飼養することが経営発展に重要なのです。